



教科書コレクション 情報

坂口和子

現代日本研究資料センター

教科書を見れば、その国家なり社会の現在の姿が分かるという。教育の源泉とも言うべき教科書には、時代が求める理想的な国民像、あるいは人間形成のあり方や歴史観が盛り込まれているからだ。かつて教科書は神聖な書物と見なされ、戦前においては「教科書が日本人を作った」(唐澤富太郎)とまで言われたように、学校教育は教科書中心で、「教科書を教える」あるいは「教科書を学ぶ」という考え方が主流だった。単なる教材の一つとして「教科書で教える」という戦後の新しい教科書観が登場してからも、教科書を公教育の柱として重視する傾向は変わらない。それだけに内外の社会的関心も高く、国の歴史教育に対する関わり方を問う故家永三郎教授による教科書訴訟問題や、国際摩擦にまで発展した「新しい歴史教科書を作る会」の教科書(扶桑社)の検定と採択をめぐる一連の事態は、教科書の持つ多大な影響力の証しともいえよう。殊に最近の日本研究においては、専門分野に関わらず教科書を第一次資料として利用する機会も多くなった。今回は、生涯学習における「学び直し」あるいは「自分探し」の道具としても、熱いまなざしが向けられている教科書コレクションのサイトを訪れてみたいと思う。

現在、日本の教科書は国定ではなく、執筆者と教科書会社の自由な裁量に任せる一方で、最小限の枠として検定制度を設け、基準からはみ出した部分を修正する方式をとる。検定に合格した教科書を現場で使うかどうかの選択は、教育関係者に委ねるといったものだ。しかし、現行検定教科書制度に至るまでにはいくつかの制度上の変遷があり、概ね、1. 学制実施以前(江戸時代～明治4年)、2. 検定制度実施以前(明治5年～明治18年)、3. 検定教科書期(明治19年～

明治35年)、4. 国定教科書期(明治36年～昭和20年)、5. 文部省著作教科書期(昭和21年～昭和23年)、6. 現行検定教科書制度(昭和24年～)に分類される。一方、教科書の発行と供給は、教科書制度の如何に関わらず、戦前・戦後を通して民間の出版社に委託されてきた。

東書文庫：教科書の図書館

<http://www.tosho-bunko.jp/>

教科書出版の大手、東京書籍株式会社の創立25周年を記念して1936年に開設された「東書文庫」は、日本で最初にできた教科書の専門図書館である。日本の教科書の体系的な収集と保存にかけては定評があり、文部省より寄贈された明治時代の検定教科書を中心に、近世の寺子屋時代から今日にいたる教科書およそ15万冊を所蔵する。アーカイブ化への取り組みも積極的で、貴重書をはじめ劣化の激しい終戦直後に印刷された教科書などを、随時画像データとして入力する作業が進められている。(デジタル化された目録検索システムおよび全文画像は、今年5月までは東書文庫閲覧室の端末よりアクセスでき、一部はウェブ上でも公開されていたが、都合により現在公開されているのは目録検索システムのみとなった。)ひらがな、カタカナ、漢字のいずれでも入力することができる「東書文庫」の目録検索システムでは、書名および著者名によるキーワード検索と、発行年、学校区分、及び教科区分の三つのフィールドからリストアップされたそれぞれの分類事項を選択して組み合わせる抽出選択とがある。例えば、教科書制度の変遷に基づいて区分された「発行年代」の選択肢を選んでクリックするとそれに該当する選択肢が表示され、その中から一つを選ぶとさらにそれに適応する選択肢が表示されるというように、それぞれの選択肢は相互に関連づけられ、教科書に関する知識がなくても簡単に体系的な検索ができるような工夫がデータベースの枠組みに活かされている。但し、表記の揺れに関するシソーラスコントロールはなされておらず、例えば、

「読本」、「とくほん」、「どくほん」など、入力のしかたによって検索結果が異なる。なお、東書文庫のホームページでは、教科書制作に関する様々なエピソードを綴った「教科書今昔」や「教科書研究」など、教科書会社ならではの興味深い情報を楽しく紹介する「東書文庫通信」のコーナーもあり、一見(読)をお勧めしたい。

広島大学附属図書館

「教科書コレクション」

<http://cross.lib.hiroshima-u.ac.jp/>

近代日本の学校教育は明治5年(1872)の学制公布により始まったが、国民の教育への関心はすでに近世にもみられ、一般民衆への初等教育は寺子屋などを通してかなり普及していた。広島大学附属図書館が構築する「教科書コレクション」は、往来物と呼ばれる江戸時代の教科書から昭和26年までの教科書を体系的に選び画像化したものである。これまでに収録された5,600冊の内、国定教科書期(明治36年～昭和20年)のものが過半数を占めるが、往来物をはじめ、検定制度実施以前(明治5年～明治18年)および検定教科書期(明治19年～明治35年)の教科書のほとんどを全文画像で見ることができ、その他のものもすべて部分的に画像化されているので、教科書を通して近世から現代にかけての日本の教育史を鳥瞰できるのが特長だ。教科書は子どもたちが学校で最初に出会う活字メディアでもあり、殊に時代考証が厳格になされた教科書の挿し絵は、子どもたちの学習理解を助けるばかりでなく、価値観や美意識を育てるという重要な役割も果たしてきた。活字と挿し絵で表現されたメディアとしての教科書を高精細画像で読む(見る)ことができる意義は大きい。最初の色刷り教科書として昭和8年(1933)に登場した美しい桜の挿し絵が印象的な「サイタ サイタ サクラガ サイタ」で始まる「サクラ読本」や、太平洋戦争が勃発した年に作られた「アカイ アカイ アサヒ アサヒ」の「アサヒ読本」の冒頭部分が画像で蘇る。遠くて近い昭和前期の初等・中等教育の教科書も



多数含まれる「教科書コレクション」は、特に高齢化社会に於ける往年の読者が「少年少女時代の自分と出会う」場としても活用できる点は注目されよう。また、GHQの指令で戦後初めて新しい日本歴史の教科書として作成された『くにのあゆみ』も入っており、専門分野に関わらずこれら時期を扱う日本研究者にとっては尽きせぬ興味をそそられるに違いない。画像表示には様々な工夫が見られ、左フレームに表示されたページめくりのボタン一つで巻頭、前頁、次頁、巻末へ移ったり、あるいはページ指定で見たいページの番号を選べば一気にジャンプできるなど、実際に原本を手にとって頁をめくるような感覚で端末上の閲覧を楽しめる。また、100項目を超える細分化されたデータベースの枠組みは秀逸で、予備知識がなくても絞り込み条件をいろいろ組み合わせさせて自在に検索でき、OPAC横断検索も付いているため極めて使い勝手がよい。往来物も教訓、語彙、歴史、地理、理数、消息というように内容によって分類がなされているので目指すものを効率的に探すことができる。

東京学芸大学附属図書館
「望月文庫往来物目録・画像データベース」「双六コレクション」「E-TOPIA」(教育系電子情報のナビゲーションシステム)
「望月文庫教科書コレクション」
<http://library.u-gakugei.ac.jp/lbhome/mochi/mochi.html>
(往来物 50音順 キーワード検索)

<http://library.u-gakugei.ac.jp/orai/color/index.html> (往来物カラー)

<http://library.ugakugei.ac.jp/lbhome/sugoroku.html> (双六)
http://library.u-gakugei.ac.jp/etopia/index_s.html (E-TOPIA)

遊びながら学べる教材として17世紀に発達した絵双六は、浄土双六、名目双六、道中双六など様々な種類があるが、多くは教訓的あるいは社会的・文芸的な一般教養を高めるためのもので、近世庶民教育および近世児童教育資料として見

逃すことができない。東京学芸大学附属図書館は、娯楽性をもちながら鑑賞にも耐え得る美しい玩具として人気のある江戸時代から明治期までの双六コレクションを収蔵する。また、同館の「望月文庫」は往来物や戦前の師範教育に関連した教科書コレクションを数多く収蔵していることでも知られるが、幸いこれらのコレクションは現在ほとんど電子化されており、全文をFlashPixフォーマットを利用した高精細画像でみることが可能。但し、「双六コレクションデータベース」には検索機能はなく、一覧リスト(116件)の中から目指すものを探すという方式だ。一方、「望月文庫往来物目録・画像データベース」(約950件収録)は、かな書名の50音順に整理された一覧から選ぶ方法とキーワード検索の2通りがある。なお、「望月文庫」のコレクションは、東京学芸大学附属図書館が構築する教育情報の総合システム「E-TOPIA」に入っており、ここの画面の「教育資料検索システム」から詳細な検索ができるようになっている。細分化された検索機能を持つこのシステムは、基本的に前述の広島大学で構築されているデータベースと共通する。特筆すべき点は、検索結果を5項目(書名、著者名・関係者名、発行者名、日付)の中から優先順位をつけて昇順・降順に並び替えることや、画像を印刷することはもとより、メールで転送したり、データを保存できることだ。ページごとに現れる画像は鮮明で見やすい。強いて難点といえば、データ量が大きいため画像が現れるまでに時間がかかり、見たいページへ一気にジャンプすることができないことであろう。

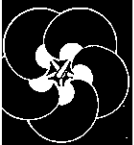
奈良教育大学教育資料館「往来物目録・画像データベース」
<http://www.nara-edu.ac.jp/LIB/siryokan.htm>

<http://beth.nara-edu.ac.jp/COLLECTION/collection.htm>

<http://beth.nara-edu.ac.jp/NYOHITSU/female.htm>

<http://www.nara-edu.ac.jp/search.htm>

往来とはそもそも手紙・書簡を意味し、往復一対の手紙の模範文をいくつも集めて編集したものを総称して往来物と呼ぶ。その歴史は古く最初の往来物が登場したのは平安末期まで遡るが、明治の初期まで存在し、殊に近世における民衆の手習いの教科書として広く使われた。武家の子弟が藩校で漢籍を教科書として用いたのに対し、庶民の子どもたちは寺子屋で往来物による手習いや習字を中心に日常生活に必要な知識や作法を学んだという。奈良教育大学教育資料館の「往来物 目録・画像データベース」は、商業・農業などの職能や実業について教える意図で編纂された往来物を中心に、庶民の衣食住に関わる各種の日常的な商品や用具類の名称を表わした絵字引などを全文画像で提供している。この他に女性用の手紙や習字の手本を集めた「女筆手本」も収録されており、各作品に付された概要の解説は読み糧がある。当時の木版印刷技術水準の高さを示す色彩鮮やかなこれらのコレクションは、保存状態も良く、高精細画像でひととき眺められる。往来物は教育史研究の重要な資料であるばかりでなく、近世史研究の全般に関する社会資料としても見逃せない情報源だ。江戸時代には女子用往来物は約1,500種ほど存在したというが、男尊女卑の封建社会であったこの時代に、女性にも文字教育を施していたことを示す「女筆手本」は、国民皆学の芽生えを示すものとして興味深い。往来物、女筆ともに収録された画像は多くないため、検索条件はリスト形式による一覧検索と、フリーキーワードをスペース区切りで組み合わせ、AND・OR・NOTの検索式で



指定するだけの極めて簡単なものとなっている。画像表示でユニークなのは、左右見開きのページが一度に見られる点で、広島大学のデータベースのように見たいページへ一気にジャンプすることも可能だ。

早稲田大学附属図書館
「国語教科書データベース」
<http://www.dept.edu.waseda.ac.jp/textdb/>

教科書の検定は4年に一度行われ、学校種別や学年で年度ごとに検定対象となる教科書が分けられている。前回(2001)の中学校の国語教科書検定では、これまで多くの日本人に親しまれてきた夏目漱石や森鷗外といった明治の文豪の作品が、中学校の国語の教科書から消えたと話題になった。「ゆとり」教育を重視した新しい学習指導要領や、学校の完全5日制の導入による授業時間数の減少から、小中学校の学習内容がおよそ3割程度削減されたためだ。「早稲田大学国語教科書データベース」は、時代や教育環境によって変貌する教科書の内容を仔細に調査・検討するのに最適のツールである。例えば、漱石の『こころ』や鷗外の『舞姫』のどの部分が、高校の国語教科書に採録されているかや、『徒然草』のどの章段が一番多く所収されているかなど簡単に調べることができる。著者名検索では表記の揺れにも対応しており、例えば「藤原定家」、「ふじわらのさだいえ」、「ふじわら さだいえ」、「ていか」のいずれでも同一の検索結果が得られる。検索機能が柔軟なのが特徴で、和歌や俳句はキーワードでも検索でき、作者ごとにどの作品がどの教科書に収録されているかが分かる。また監修者名はもちろん編集委員名でも検索できるなど、いわば「教科書の顔」を見ることも可能で、出版社ごとに教科書の特色を調べたり、国語教育の現場においてどのような教材が供給されてきたか、なぜそのような教材が教科書に採用されたのか、どのような意図で編まれたのかなど、記述の変遷を細かく辿ることができる。但し、現在入力されているのは最近のデータに限

られているため(1992年度から2000年度検定教科書まで)、データベースとしての機能には制約がある。少なくとも戦後の検定制度が開始されて以降の国語教科書の変遷が辿れるよう、データの遡及入力となされることが期待される。

明治以降外国語教科
データベース検索
<http://www.wakayama-u.ac.jp/~erikawa/index.html>

グローバル時代における国際理解の一環として、最近では日本の小学校でも英語教育が行われるところが現れ始めたが、戦前でも必修科目ではないにしても、小学校で英語が教えられていた。和歌山大学が構築する「明治以降外国語教科書データベース」は、英語教科書の変遷史を辿る場合に欠かせない目次情報を提供している。輸入に頼った初期の英語教科書をはじめ、日本人の英学者による教科書が登場した1887年(明治20)から1947年(昭和22)までの文部省著作および検定済外国語教科書を中心に収録する。英語教科書は会話、読本、文法、作文、習字など内容別に10通りに分類され、キーワード検索の他に、著者名、タイトル名、発行日付、検定年月日、発行者、さらに原本の所蔵者名でも検索が可能で、検索結果を3通りの組み合わせでソートできるようになっている。しかしながら、本稿執筆時にいくつか試みた検索例では、2通り以上の組み合わせをする場合は正確度の点でやや問題があった。また、表記の揺れに対するコントロールがなされておらず、新・旧漢字では検索結果が異なる。伝統的に日本の英語教育は読解と文法に偏っているという指摘があるが、これまでに入力されたおよそ5,700件の内、読本が半数近くを占め、習字、作文、文法などがこれに続く。また、英語の教科書の編集に関わった著者の中には、岩倉視察団に最年少者として参加した津田梅子や、詩人・翻訳者として活躍した上田敏などの名前も見られ興味深い。なお、データベースは右フレームに表紙、扉、目次、奥付の画像が現れるような

枠組みも用意されているが、今のところまだ画像データは入力されていないようだ。英語教科書の実物画像を見たい場合は、前述の「広島大学附属図書館所蔵教科書コレクション」のデータベースで、学科(教科)名を「英語」で選択すると、戦前に使われた教科書の部分画像(表紙、奥付、目次、及び巻頭の数ページ)を得ることができる。

教科書は極めて特殊な出版物である。国の予算で無償配布されるものであるから、一般書店の店頭には決して並ばないし書評も出ない。通常の書籍販売ルートに乗らない点では、灰色文献の側面を持つが、最大の特色は文部科学省の検定に合格したものでなければ教科書として認められないということであろう。しかも、お墨付きを得たものでも最終的な読者である小中高の児童・生徒の手に渡るとは限らず、出版物としての価値はひとえに教育の現場で採択されるかどうかにかかっている。さらにその際、採択の動向を決定するのは、教える側の論理で「教師の労力をなるべく軽減できるような教科書」が優先されるという噂もある。今日の教科書問題は多面的でなかなか一筋縄では行かないのは周知の通りだ。政治や外交あるいは教える側本位の論理などに翻弄されたりせず、真に学ぶ側の立場に立った知的探求心を育み発展させる教科書が教室で使われるようになることを望むのは、所詮無い物ねだりであろうか。

なお、ここで紹介した教科書コレクションのサイトのうち、最後の「明治以降外国語教科書データベース」を除いては、今夏、現地を訪問して現物資料を見学させていただき、担当者の方々から直にお話を伺う機会が得られた。この場を借りて深く感謝の意を表したい。